

農村に泊まり自然や伝統文化に親しむ吉備中央町の農家民宿事業が、2016年度の開始から10年を迎え好調だ。宿泊者は計2690人に上り、当初8軒だった受け入れ農家も10軒に増

えた。近年は海外の若者らが教育旅行として訪れるケースも目立ち、町は情報発信の強化や一層の受け入れ体制の充実を目指す。

(赤沢昌典)

吉備中央

開始10年 宿泊計2690人、受け入れ増加

「農家民宿」人気です



巻かずしの作り方を教える田中さん(左)。台湾の高校生らが日本の料理に親しんだ。

「のりの上に酢飯をさん(73)が翻訳アプリをふんわりと置いてみ 使って夕食の巻かずし作て」。5月28日、農家を指導。生徒たちはキ民宿みっちゃん家(同 ユウリや大葉など地元産町吉川)に台湾南部・食材を酢飯の上に並べ大同高の生徒2人が1 「包み方のこつが分かった。2日で滞在した。 笑顔で味わった。 経営者の田中美津子

海外の高校生らも目立つ

農家民宿の事務局を務める町協働推進課によると、宿泊は関西圏からの利用が中心で、新型コロナウイルス禍で一時落ち込んだものの、その後は団体客が増え、25年度は最多の475人となった。特徴的なのは外国人だ。町は交流サイト(SNS)での発信とともに、台湾では旅行会社を通じて宣伝を強化しており、申し込みがじわりと増え続ける。台湾やシンガポール、ドイツなどからの個人客に加え、学校単位の団体旅行が5回あった25年度は176人。全体の37%を占めた。受け入れ側も工夫を凝らす。各農家では山菜採りや竹細工作り、郷土料理体験など要望

に応じた幅広いプログラムを提供する。昨年に続き15人が来町した大同高の陳冠明校長は「大都市と違い日本の田舎体験ができる貴重な機会。親切な住民が多く、生徒は食文化や伝統的な和風建築などを学ぶことができると満足する。」と語る。さらなる知名度アップを図る町は、25年度に初めてインドネシアの高校生から団体を迎えたことを追い風に、イスラム圏の取り込みにも力を注ぐ方針だ。農家側でもイスラム教の戒律に沿った「ハラル」に適合する処理を行った鶏肉料理などを提供している。26年度は既に、海外団体客の予約が計6件入っており上々な滑り出し。町協働推進課は「要望に丁寧に応える柔軟性が強み。満足度を高めるとともに町の魅力を一層発信していきたい」としている。